

# 古野梅峰『藍島唱酬』解題並びに翻刻

—享保度朝鮮通信使との唱和・筆語—

石川泰成

古野梅峰の唱和集が合綴されていることに気づき、ここに翻刻することとした。

## 藍島唱酬解題

享保四（一七一九）年に朝鮮通信使が筑前藍島に停泊した。その逗留中、古野元軌と通信使達と応酬唱和した詩集と筆語を収めたのが本書である。享保度の藍島における唱和・筆語は、櫛田琴山の『藍島倭韓筆語唱和』と小野東谿（玄林）の『藍島鼓吹』は從来その所在が知られていた。古野梅峰については唱和に参加したが、その唱酬・筆語集は、高橋昌彦氏の『朝鮮通信使唱酬筆語目録』（下関短期大学紀要、一九九〇）及び仲尾宏ほか『朝鮮通信使関係資料目録』（青丘学術論集第二十一集、二〇〇一）においても所在は確認されておらず、從来、所在不明とされていた。先般、翻刻者（石川）が秋月郷土資料館（福岡県甘木市）の所蔵本の櫛田琴山『藍島唱和集』を調査中、この

さて著者の古野梅峰であるが、名は元軌、字は敬叔、鏡山、厚軒と号し、通称を勘助といつた。延宝二（一六七四）年の生まれ。貝原存斎、貝原益軒らに師事し、福岡藩文学となる。いわば、貝原学派に属する。元文五（一七四〇）年十月十九日に六十七歳で卒す。著作に『日本人物考』『扶桑千家詩』などがある。『扶桑千家詩』は藤原惺窓以降江戸の漢詩を集めた詩華集であり、元禄十五（一七〇二）年に京都の書肆、上原半兵衛より上梓されている。貝原益軒の序文を付しての刊行である。古野梅峰の自序によると白鳳時代より延喜天暦のころまで漢詩全盛の時代があつたが、その後中絶し、慶長元和以来、再び文運が開け、詩賦文章が盛んとなり華夏と肩を並べるようになつたので、宋の謝枋得にならい詩集を編纂したという。江戸文学史上、江戸漢詩のアンソロジーとしては比較的早期のものに属し、漢詩文の作者群が五山文学から儒家の手に移り、儒家たちの作品群の蓄積があつた元禄期にまさに適宜な企画といえよう。ただ、収載されている作者は、多くは儒者であるが、いまだ公家、五山僧といった從来までの漢詩文の担い手や、さらには無名の女性の作品までも含んでいる。鶴原九臯が跋文で「海隅の隱君子志を詩に寓して敢えて人に示さず、示せども遐僻の地に流転することを獲ざるものいくばくぞ。これ鏡山子の憾む

ところ、韜（鶴原九臯）もまたこれを憾む」とのべ、奥州から九州までの地方儒者を積極的に採録の対象としていることが窺える。

こうした詞華集を編纂する程、詩文に興味を示し、当時、詩才を謳われた梅峰であれば、朝鮮通信使を迎えての応接の任に当たることはまさに適任であつたであろう。

朝鮮側の顔ぶれを見てみると、

申維翰、青泉と号す。製述官

姜栢、耕牧子と号す。正使書記

成夢良、嘯軒と号す。副使書記

張応斗、菊溪と号す。従事官書記

の四名である。この他、朝鮮側と福岡藩側との仲介に当つた対馬の雨森芳洲の書簡一通も収める。

古野梅峰が朝鮮通信使を迎えて詩文の応酬、筆語に及んだのは、享保四年の八月四日が初会で、八月六日は直接応接せず、詩文の贈答のみが行われ、続いて八月七日に二度目の応酬の文会が行われたようである。享保度の朝鮮通信使と応接した時、古野梅峰四十六歳のときにある。

福岡藩側は彼のほか櫛田琴山が同席した。櫛田琴山には『藍島倭韓唱和集』と題するこのときの応酬筆談録が残されており、それによれば八月三日と七日の二度、製述官の宿舎に行き文会したことになっている。同集を仔細に見てみると、六日にも会

同しており、個別に面会した理由は不明で、この間、なんらかの事情が存在していたのかもしれない。いま、二書からこの間の日程表を示すと、

行 程	古野梅峰	櫛田琴山
八月一日	藍島到着	
八月三日	出席	
八月四日		出席
八月五日	贈答（仲介・芳洲）	贈答
八月六日		出席
八月七日		
八月八日	出席	
八月九日		
八月十日	藍島出発	

この表から窺えることは、実質的な応接は八月三日から、七日であり、交互に出席したかたちになつていて。五日の日は詩文の贈答のみとなつていて、その朝鮮側から送られた内容は、櫛田琴山・古野梅峰の二人宛の詩文を櫛田琴山に届けられた模様で、各唱和集に載せるところの詩は同じである。琴山の唱和集の八月八日のところに收めている青泉、嘯軒からの詩は、七日の梅峰の韻を次いでの作を櫛田琴山に送り、琴山にさらに和

を求めたものである。九日のものはそれに対する櫛田琴山からの返詩である。享保度の藍島における福岡藩儒の応接及び朝鮮側の評価などの詳細については別の機会に譲るが、梗概は以上の通りである。

本書の略書誌を記せば、写本、大一冊。十二行十六字。返点、一部送り仮名、縦点が付されている。奥書、識語等はなく、抄写年は不明である。

## 凡例

一、略字、異体字等は正字に統一したが、一部の書体は通行のものによつた。

一、縦点・送り仮名は原本のとおり移植した。ただし、合字表記（コト・シテ・ナリ）のものは開いてカタカナ表記にしている。また、縦点については、訓読みを示す左傍線はそのまま移点したが、音読みを示すものは右傍線と字中央の線の二種があつたが、厳密な朱引の体例がなく、字間の寛狭によつているため、今次翻刻では、音読みを示す縦点はすべて右傍单線とした。

一、詩については原本では一句ごとの断句等はなされていないが、本翻刻では毎句一字空格とし、二句で改行し閑読に便ならしめた。また、筆語、書簡には翻刻者により断句を施した。

## 藍嶋唱酬

古野元軌稿

享保四年、朝鮮國之聘使、洪致中、黃璿、季朝彥來朝、時古野元軌與櫛田琴山同奉君命、六月到藍嶋、俟韓客來過。八月朔、客船發岐嶋勝本港、同夜半來藍嶋。上下官員皆下船就賓館。四日對馬之書記雨森芳洲延予輩入學士會、初會學士及三書記。筆語唱酬如左。

通刺

滄溟萬里、經夏彌秋、越鯨波、蹈險浪。王事靡鹽、辛勤何易。言乎。然天錫鴻禧、德宇亨嘉、錦帆無恙到此地。實使華之榮、兩國之慶、萬萬至祝。僕姓古野、名元軌、字敬叔、別號梅峰。筑前州之書生也。今幸獲見大邦之君子、所謂荊州一面榮不換封候者乎。喜躍有餘。海涵。

己亥八月四日

梅峰古元軌拜

僕姓申、名維翰、字周伯、官今秘書著作郎、號青泉。以製述官乘槎遠來萬里、仙區得諸君雅意、見訪欣幸而已。願數清襟、穩做永夕之歡也。僕姓姜、名栢、字子青、自號耕牧子。今年三十、見充

## 正使記室

僕姓成、名夢良、字汝弼、號嘯軒居士。今以副使記室、隨節東來、而旅館閑寥之際、猥枉群賢、清晤。何幸、何幸。僕姓張、名應斗、字弼文、號菊溪散人。行年五十、今以從事官書記、獲到貴邦、得接雅儀。

良幸、良幸。

詩

奉呈學士公及書記三公

梅峰

壯遊萬里乘長風、豪氣凌雲入日東。應喜善隣尋舊好、國華改見屬群雄。謹和梅峰見贈

扶桑樹下弄秋風、繫纜長歌天地東。邂逅峩洋琴裏曲、海山千古得詩雄。

奉和梅峰惠示韻

一嘯扶桑萬里風、錦帆無恙掛天東。袖中携得瓊琚什、喜對騷壇兩箇雄。

奉和梅峰辱贈韻

萬里雲帆駕遠風、天教看盡廣桑東。百年隣好交修地、喜接諸公一代雄。

疊和梅峰韻要和

萬古千秋遺風、絃誦洋洋。日出東

既得芳洲又得子方知淑氣產群雄

再疊奉酬謝嘯軒詞伯

彩鶴揚乘好風滄溟萬里向桑東

六鰲不動蓬壺靜

仙筆隨場見俊雄

疊奉次梅峰韻要和

菊溪

重溟飛渡一帆風二嶼烟霞萬國東

二妙高標偶不俗清詞健筆敦爭雄

重步前韻奉答菊溪詞宗梅峰

霜蹄千里逐秋風逸氣遙馳阿每東

誰識即今萍水裏新知托契對豪雄

城字韻奉

黃鶴仙人出赤城乘雲渡海亦詩情

竭來笑把洪崖手贈以瓊華象外盟

奉次青泉公韻

由來趙璧價連城偶把餘光慰下情

才德羨君冠一世斯文今幸得宗盟

呼韻呈梅峰詞伯

雨中簑笠自仙城月披冰襟不世情

窗外梅花栽幾樹芳心共托歲寒盟

奉次嘯軒成公韻

萬里星輶指武城蓬壺物色慰賓情

筆回峽水詞源沸此日騷壇見主盟

即席號韻共賦仰塵琴山梅峰清案要和

佳山美水日東城徐福祠前萬古情

自幸塵蹤到仙境喜修隣好百年盟

次韻奉謝菊溪詞案

翩翩才氣壓灤城詩句風流不世情

豈料祇今傾蓋地薰蕕同器結驩盟

奉呈青泉公及書記三公

相逢禮意感慇懃只愧孤雞媒鶴群

坐上今聊裁俚句不堪鼻璽托風斤

謹和梅峰見贈

清談盡日接慇勤玉樹青蒿與作群

自愧梁珠無照乘看君金璧重千斤

奉次梅峰示韻

一床談笑接慇勤更見清詩思不群

遊子從今行臺富雙南秋色重千斤

奉謝梅峰見贈

多謝諸公意慇懃綺篇清格迥超群

春雲不足論其妙堪比吳剛琢月斤

五日贈答

和謝梅峰辱示韻

滄溟空闊自天風遠客船槎赤岸東

愧乏少陵奇壯語詩成敢敵洞庭雄

耕牧堂

菊溪

復呈梅峰詞伯

耕牧堂

蓬山雲霞擁樓臺 緑髮仙人騎鶴來

身騎鸞鶴上瑤臺 採藥群仙待我來

相逢碧海新秋雨 笑指三花樹樹開

霽日涼颸藍浦口 倚欄遐眺海雲開

奉和耕牧堂韻 梅峰

牙檣掛月遙江臺 李郭仙舟乘興來

霽月懸光江上臺 清風一樣玉人來

多謝即今文酒會 蓬心只覺對君開

扶桑秋色入吟興 更見詞華坐上開

身騎鸞鶴上瑤臺 採藥群仙待我來

偶得一絕奉呈琴山梅峰文斐要和

身騎鸞鶴上瑤臺 採藥群仙待我來

天高海闊望鄉臺 遠客孤舟秋色來

身騎鸞鶴上瑤臺 採藥群仙待我來

病裏忽聞金鼓響 墨兵新勒戰場開

身騎鸞鶴上瑤臺 採藥群仙待我來

奉次耕牧堂韻 梅峰

身騎鸞鶴上瑤臺 採藥群仙待我來

喬雲興處凝霞臺 海外騷仙題句來

身騎鸞鶴上瑤臺 採藥群仙待我來

一面定交無異域 百年懷抱對君開

身騎鸞鶴上瑤臺 採藥群仙待我來

和呈琴山梅峰詞案 梅峰

身騎鸞鶴上瑤臺 採藥群仙待我來

流動色香有古風 幾春花鳥惱天東

身騎鸞鶴上瑤臺 採藥群仙待我來

十年養得青霞氣 今日輸君筆力雄

身騎鸞鶴上瑤臺 採藥群仙待我來

再疊謝耕牧堂 梅峰

身騎鸞鶴上瑤臺 採藥群仙待我來

一片錦帆乘海風 蓬弧壯志極天東

身騎鸞鶴上瑤臺 採藥群仙待我來

縱橫揮筆更無敵 君是詞場獨步雄

身騎鸞鶴上瑤臺 採藥群仙待我來

次耕牧堂韻奉呈琴山梅峰吟詞案

身騎鸞鶴上瑤臺 採藥群仙待我來

蛟龍潭窟蜃樓臺 直駕艤船泛泛來

身騎鸞鶴上瑤臺 採藥群仙待我來

邂逅梅琴兩詞客 客中襟抱對君開

身騎鸞鶴上瑤臺 採藥群仙待我來

又

同

菊溪

耕牧堂

又 同

五彩雲興耶馬臺 當年徐福訪仙來

身騎鸞鶴上瑤臺 採藥群仙待我來

方看蓬嶼千秋景 遙映繡鞍行色開

身騎鸞鶴上瑤臺 採藥群仙待我來

磊落胸中羅斗象 活然彩筆吐鸞鳳

身騎鸞鶴上瑤臺 採藥群仙待我來

千年隣好聘儀敦 一日懽情盃酒香

身騎鸞鶴上瑤臺 採藥群仙待我來

曾聞箕域文華盛 逢地幸觀上國光

身騎鸞鶴上瑤臺 採藥群仙待我來

何厭論交言語異 要君暫欲探書囊

身騎鸞鶴上瑤臺 採藥群仙待我來

和梅峰見贈

身騎鸞鶴上瑤臺 採藥群仙待我來

無數棕杉生海嶼 扶桑曉日漾天光

身騎鸞鶴上瑤臺 採藥群仙待我來

千金臺上出驥驥 五色雲閒來鳳凰

身騎鸞鶴上瑤臺 採藥群仙待我來

交態雅如秋水淡 詩篇清得古梅香

身騎鸞鶴上瑤臺 採藥群仙待我來

長洲繫纜神仙事 采采瓊華滿錦囊

身騎鸞鶴上瑤臺 採藥群仙待我來

奉呈姜公及成公張公吟詞壇

身騎鸞鶴上瑤臺 採藥群仙待我來

千載漢儀文物盛 約章龜紫映桑天

身騎鸞鶴上瑤臺 採藥群仙待我來

淳風未喪檀君德 聖學猶存箕範篇

身騎鸞鶴上瑤臺 採藥群仙待我來

鳥邱炯霞迎遠客 雞林國寶富才賢

身騎鸞鶴上瑤臺 採藥群仙待我來

梅峰

波瀾隨地巨毫落此日騷壇見謫仙

奉酬梅峰惠韻

耕牧堂

樓臺海上金銀氣蓬嶼烟霞貯別天

悵望幾回珠樹月相逢却贈白雲篇

夢還花筆慚吾退興托梅峰覺子賢

聞道靈區多藥草提携欲訪鍊丹仙

嘯軒

和呈梅峰惠示韻

虛閣卷簾飛鳥背扶桑霽色眇秋天

方深王粲登樓恨忽枉興公擲地篇

箕壤即今通好信葦原從古富英賢

峰頭幾詠黃昏月和清香梅便是仙

日東古域方全盛璽劍何年降九天

氓俗尚知遵法制士林爭喜詠詩篇

山山瑞草延齡藥落落環村並世賢

眉帶青霞奇氣色不妨呼子作神仙

奉和梅峰惠示韻菊溪

芳洲

韓客和章特傳達照領爲望適在忙劇之中不能修書奉候事涉不恭幸勿深咎明日倘無風便或有相見之期未知肯許穩討否耶琴山兄今日暇清寫此書呈幸爲相致如何。

啓

芳洲

我國諺文有十六行每行十二字以通天下萬物之聲無不如此意實我聖朝祖宗之所創設也閨巷愚民不識真文者皆用此通情知文者則無所致力而官文書及士大夫相問之際絕不用諺但於小民私書及告語愚夫愚夫間多用此爲之婦人小兒皆能一

梅峰

復

蒙示諭且韓客之高和四篇領納實木投瓊報不依足下之先容豈有得如榮乎。感刻感刻幸爲僕謝三四公見投琴山高和速達了縷縷期後會耳。

七日文會

青泉

項得清製報以木瓜其已笑納否秋雨若此、

行期苦滯客懷不可言唯以更接佳話爲幸耳。

答

梅峰

向者獻魚目辱賜隋珠盛貺感荷他日爲歸鄉之榮且過承見爾悚汗何已今也再得陪警咳奉中餘論上喜躍不可比只恐不免戮賢之罪耳。

問

梅峰

貴國諺文僕輩偶見之不能解未知有字員幾許乎當年製之如何想下民不識真文者用之代結繩蓋雖士大夫亦有因事或用諺文乎。

答

青泉

見テ而知レ之矣。

問

梅峰

曾聞貴國當年有ニ金生一善レ書。宋楊珠偶見其行草書、  
疑曰、天下除ニ王右軍一焉有ニ妙筆一如レ此哉。元趙  
孟頫亦稱ス金生書深有ニ典雅刑。由レ此觀レ之、金氏書法  
入レ神可レ知。如何。其真跡倘有ニ珍藏スル者而今猶存スル乎。

答

青泉

金生筆力千古絕妙、距ニ其生ニ可レ至ニ千五百年。真蹟則或  
有レ所藏ル而不レ可ニ多見。刊本則盛ニ於東華、而不レ無ンバ  
久遠失レ真、如レ嶧山短碣不ニ傳刻者。可レ恨、可レ恨。

奉レ呈ニ青泉申公及書記三公吟詞壇

梅峰

兩國新知樂 詞壇見ニ謫仙  
懸慙詩數至 盛意此中傳

胸次吞雲夢 彩毫吐紫烟  
叨將蠅翼短 托レ驥是天緣

和ニ梅峰詞伯 韻

客帆停遠浦 蓬島問群仙  
兩色樽前過 秋色筆下傳

興酣鷗浴水 吟了鴈嘶烟  
明發乘潮去 蒼茫後會緣

和ニ呈梅峰詞伯

耕牧堂

暫涉蓬山路 相逢鍊骨仙  
青峰戶外秀 綠酒雨中傳

孤棹停沙岸 群鷗起井烟

天涯今日會 深覺是前緣

奉レ和ニ梅峰詞伯 韵

高樓臨碧海

佳會惣詩仙

音以ニ琴絃賞 心將ニ筆舌傳  
秋聲簷滴雨 暮色行含烟

旅館偏寥闊 重遇信有縁  
奉レ酬ニ梅峰玉韻

西湖舊處士 東海即詩仙  
標格元無敵 淵源必有傳

揮毫落珠玉 伸紙散雲烟  
野人同首青藍嶼 賈生宣室席尤前  
李昉鰲宮毫數擢 紫綬金章照綺筵

此地今相遇 從知是宿緣  
奉レ呈ニ青泉公及書記三公

由來豪俊擅榮選 賈生宣室席尤前  
野人同首青藍嶼 賈生宣室席尤前

只愧陋邦無好況 塘苗維馬停高賢  
和ニ梅峰詞伯 韵

明光獻賦當年事 尚憶簪花近  
紫禁香烟揮筆外 青藜神火纏經前  
御筵

孤槎忽傍支機石 一橐還窮折木天

那意海山秋雨裏 客床談笑對群賢

奉和梅峰見贈

耕牧堂

翩翩廣袖金花帽

偶坐仙翁勸酒

開戶雨鳴人語外

滿囊詩積鷹來前

今朝筆硯還同席

半世山河各一天

方識筑前梅樹裏

百年經籍有群賢

奉和梅峰几下

嘯軒

佳客叩門秋雨裏

試推風牖揚塵筵

看來秀氣浮眉際

報道香梅在筑前

長短詩篇當縞苧

低昂談話到開天

似聞里閈交游足

竹宇琴山搃是賢

奉酬梅峰見贈

菊溪

驚喜群仙回

玉昇始開高閣敞華筵

扶桑日月持盃外

藍嶼烟雲撫劍前

木子才雄堪賦海

丹丘興逸欲談天

貴邦無限風流輩

翰墨推君一代賢